

# 日本語・ドイツ語・英語の指示詞の比較に関する一考察

吉田光演

## 1. 序論<sup>1)</sup>

日本語には冠詞はないが、指示詞(demonstrative)と呼ばれる「コソア」表現が発達しており、指示代名詞(これ・それ・あれ)、限定詞(この・その・あの+N(名詞))の役割がある。これらは、発話場面にある対象を指示する直示(ダイクシス: deixis)、前後の表現と文脈的に一致する照応(anaphora)として、指示(reference)機能を担う。コソア表現は、英語の this, that の二分法と比べても、豊かな区別を表し、近称・中称・遠称として三層的に理解されることが多いが、解釈はさまざまである(佐久間 1936/1951、三上 1970、久野 1973、黒田 1979、金水・田窪 1990 等)。他方、ドイツ語指示代名詞 dieser (dieses, diese), jener (jenes, jene)は、英語の this, that (these, those)と同じく二層的である。これらは、次のような図式(1)で表せる(proximal「近接」, medial「中距離」, distal「遠距離」, Lyons 1999)。

(1)	proximal[+prox]	medial [-prox, -dist]	distal [+dist]
日	kore, kono	sore, sono	are, ano
英	this	-	that
ド	dieser (dies-)	-	jener (jen-)

しかし、この図式は問題がある。まず、日本語「コソア」を三層的に区別できるかどうかである。第二に、ドイツ語 dieser, jener については、現代ドイツ語では対比が崩れ、jener が退化しつつある。現代ドイツ語では、近接 dieser が多用され、また、定冠詞に似た der, das, die の指示代名詞用法も多用される(吉田 2013)。立場によって異同があるが、(1)のような直示・照応に関連する表現を「指示詞(demonstrative)」、(this is/das ist の this/that のような)名詞句に対応する単独表現を「指示代名詞」とし、this book/dieses Buch の this/dieses N のような名詞を限定する用法を「限定詞用法」と呼び、表現を一般化する場合には this 系、das 系とする。ドイツ語定冠詞 der/das/die と類似した指示代名詞(及び限定詞用法) der/das/die を「der 系指示詞」と呼ぶ。定冠詞と異なり、der 系指示詞は、形態的に有標の形式 dessen, deren, denen を持つ(強勢アクセントも担える)。der 系指示詞は距離的制約が少なく、広く対象物の直示一般に使える。この事実によって、(2)のように、ドイツ語では英語の this, that との平行性が崩れてしまっている(後述のように遠称表現として dieser 系、der 系が使える場合もある)。

(2)	proximal	distal
英	this	that
ド	dieser (dies-)	
	← der (das, die)	→ [-proximal,-dis]

よって、this=dieser, that=jener のような並行解釈はできず、また、dieser=「コ」、jener=「ア」の関係も成立するとは限らない。そのような想定はむしろ誤解を招きかねないので、ドイツ語学習の際にも要注意である。本格的な比較研究のためには、理論的にも経験的分析においても深い検討が必要であるが、本稿では、主にドイツ語指示詞 *dieser*, *der* 系を軸にして、日本語のソ系、英語の指示詞 *this/that* との比較を行う。2 節で直示と照応の関係を考察し、3 節で3つの言語の直示を比較し、情緒的な直示用法、日本語のコソアの特徴を見る。これを踏まえ4 節で、ソ系指示が含む依存解釈を検討し、5 節で照応との関連でソ系と *der* 系の類似性を分析し、*dieser* と *der* 系の相違を見る。6 節で、ドイツ語と他の言語について指示詞の相違をまとめる。

## 2. 直示と照応

直示と照応は、言語外の対象を指すための異なった手段と考えられることが多い。直示は、発話状況と関連する指示物を指す。「いま、ここ、私、*now, here, I*」のような、話者の発話原点(ラテン語 *Origo* 「出発点」)を表す表現や、そこからの距離を表す表現である(Bühler 1934)。照応表現は、発話状況ではなく、先行詞や後続表現など、前後の言語表現(談話、テキスト)と文脈的に関係することによって間接的に対象を指示する。しかし、この区別は絶対ではなく、重なりもある。いずれも対象と関わる言語表現という意味で、前者が外部照応(*exophora*)、後者が内部照応(*endophora*)と呼ばれることもある。あるいは、話者の *Origo* を出発点に直示として一元化する方向もあり、指示詞による照応を *Anadeixis* (照応直示)と呼ぶこともある。

Heim & Kratzer (1997)が指摘するように、両者は一部重なり合う。たとえば、(3)のように、典型的照応代名詞 *he* が直示的に使われる場合もある (Heim & Kratzer (1997)の例)。

(3) *I am glad he is gone.* (直示の *he*)

(4) *I don't think anybody here is interested in Smith's work. He should not be invited.*(照応)

話者・聞き手を表す一人称・二人称代名詞(*I/ich, you/du*)は、固有の直示表現であり、発話場面が関与する。それらは指示対象が状況によって変わる指標表現(*indexical*)である。つまり、状

況  $s$  に依存する関数表現  $f$  で、 $I=f(s, Sp)$ ,  $you=f(s, Hr)$  のように表せる (状況  $s$  と話者  $Sp$  が変われば  $I$ ,  $you$  の値も変わる)。他方、三人称代名詞 ( $he/er, she/sie$ ) も、話者・聞き手以外の対象を指示する可変的表現であるが、照応か直示かは決定できない。(3)では指差しなど、対象を指すことで同定できる直示であり、(4)では、前文の固有名詞を先行詞として導入することによって、同一指示物を指す。つまり、言語外の指示対象がどのような仕方で顕著なもの ( $salient$ ) として同定されるかという指示の仕方の問題である (Heim & Kratzer (1997))。顕著さについては、Heim (1982) の指摘したように、直示による対象指示か、言語表現による文脈的指示のいずれかが必要であり、単に心理的に推論できるといった暗黙の条件では満たされない ("I dropped ten marbles and found only nine of them. ??It is probably under the sofa.", Heim (1982) の例、「おはじき 10 個のうちの 9 つ」の表現から残り一つを「it(それ)」として関係づけることはできない)。

このように直示と照応を把握すると、①個別言語によって直示・照応表現が多様であることはどのように説明されるのかという類型・言語的普遍の問題、②個別言語の中でも直示・照応表現が複数種類見出されるはなぜか、という個別言語的問題に直面する。人称代名詞は照応、 $this/that$  ( $dieser/jener$ ) のような指示代名詞は直示といった機能分担にはなっておらず、交差している。さらにドイツ語では、 $der$  系指示詞が加わることによって、指示表現が三種類あることになる ( $dieser$  系、人称代名詞 ( $ich, du, er/es/sie$ ), 定冠詞に類する  $der$  系指示詞)。ドイツ語指示詞の冗長性が指示代名詞  $jener$  の退化の一因と見られるが、それでは具体的な言語間の対応はどのようなものなのか? これらについて、具体例に即して比較する。

### 3. 直示における指示詞「コソア」、 $this/that$ , $dieser/jener$ の比較

#### 3. 1. 直示における指示詞の比較

英語の直示を表す  $this/that$  の対応を次の例で比較する (安藤 1986)。

(5) a. This lollipop is for you. b. Give me that filthy lollipop! (Lakoff 1974)

(5') a. Dieser/DER Lutscher ist für dich. b. Gib mir diesen/DEN/\*jenen dreckigen Lutscher!

(5'') a. この棒つきキャンディ、君のだよ。 b. その汚い棒つきキャンディ渡しなさい。

(6) What is that crowd? (6') Was sind DIE Menschenmassen (dort)?

(6'') あの人込みは何だ?

(7) a. This is my father. b. Is she going to marry THAT?

(7') a. Das ist mein Vater. b. Will sie DEN (*da*) heiraten?

(7'') a. これが父です。 b. 彼女はあいつと結婚するつもりなのか?

(5)(6)(7)のように、近称 **this** は、「コ」系に対応し、遠称 **that** は、「あの」「あいつ」と対応する。ただし、指示対象が聞き手領域（縄張り、佐久間 1951、神尾 1990）にある場合、英語では(5b)のように **that** が使用されるが、日本語ではソ系で表される(5'b)。また、物理的に話者領域にある場合でも、医師の診断など、聞き手の制御する縄張りに属すると認識される場合、距離に関係なくソ系で表される（医師「ここはどうですか?」、患者「そこは痛くないです」）。一方、ドイツ語では、近称 **this** は **dieser** 系に対応するが、遠称 **that** は **jener** 系で表されることは、現代ではほとんどない。**that** で表される場合、(5'b), (6'), (7'b)のように、**dieser** 系か **der** 系に対応する。また、**der da** (そこ), **der dort** (あそこ) のような場所副詞 **da, dort** が添えられる場合もあり、近距離、遠距離指示が可能になる。**This is/That is...(These are...)** のように、指示詞を話題とする新規対象導入（「これは、あれは…です」）は、ドイツ語では(7')の **Das ist(sind)** のように、遠近、有生・無生の区別なく中性指示詞 **das** によって表現される（単数・複数の区別もない）。しかし、目的語位置などの直示では、性、有生・無生、格に基づく **der** 系指示詞が現れる(7'b)。一方、ドイツ語指示詞 **dieser** は、近称はもちろん、遠称でも利用できる。**der** 系(**der da** 「その彼」)と同様に、**dieser da(dort)** (あそこのこの人)といった共起が可能である。<sup>2)</sup>

(8) Und der da ist Albert Einstein, dieser dort ist Robert Oppenheimer. (*Ansichten eines Unverbesserlichen*, Manfred Nemann, 2013, google.de)

**dieser, jener** の近称・遠称の空間対比が衰退したため、**diese** は空間制限を超えて利用でき、話者から距離があっても、話者の心理領域にあるものとして認識される（副詞 **hier/ da / dort** によって場所が明示される）。Leipzig 大学の Web コーパス **Wortschatz** ([wortschatz.uni-leipzig.de](http://wortschatz.uni-leipzig.de)) によれば、**dieser** の頻度は、365,422 回であるのに対し、**jener** の頻度は 14,583 回で、約 25:1 の比率で **dieser** が多い（男性対格・複数与格 **diesen** は 159,745 回、対応する **jenen** は 10,681 回。女性・複数 **diese** は 413,359 回、**jene** は 27,641 回）。顕著な差で **dieser** が優勢だが、**jener** は死語となった訳ではない。書き言葉や、**dieser – jener** の並置（近接 **dieser** が「後者」、遠接 **jener** が「前者」に対応）や、関係節を導く先行詞 **jener (jener, der ...)** として現れる ((9)は **Wortschatz** 検索)。<sup>3)</sup>

(9) Als die Suche nach dem entscheidenden Bereich des Gehirns nochmals verfeinert wurde, zeigte sich, dass der wirklich wichtige Teil des auditiven Kortex jener war, der normalerweise periphere Geräusche entdecken würde. ([www.presstext.at](http://www.presstext.at), 2011-01-21)

(10) Weißt du von jenen Heiligen, mein Herr? (Rainer Maria Rilke: *Das Stunden-Buch*, *Das Buch von der Pilgerschaft* 1901)

空間指示としての遠称 *jener* の退化は、Duden(2006)等にも言及され、先行研究で指摘されているが、原因は定かではない。英語の *this – that* のような明確な近遠の対比が *dieser – jener* の場合には空間直示に適用されず、書き言葉や((10)の *von jenen Heiligen*「あの聖者らについて」)、照応用法に限定され、会話体では指示詞 *der* (*das, die*)、および場所副詞 *hier /da/ dort* が直示に多用されるようになったと考えられる。遠称指示詞は、*that*、「あれ・あの」の場合も、話者の発話座標から遠い距離や時間的距離（過去）を示す（「あの時」, *at that time, those days*）。*jener* も同様に、空間的・時間的な遠距離を表すが、発話時点からの距離（過去）を示す場合には、「いま・ここ」の場から乖離するため、発話場面から見えず、もはや純粋な直示ではない(*jene Zeit*「あの時」、*jene Tage*「あの日々」等)。実際、Wortschatz 検索の *jener* の顕著な後続共起は、*Zeit, Nacht, Stelle, Epoche, Menschen, Mann, Tage, Länder...*の順序で多く、「人・場所」と並んで「時」を表す名詞が多い。遠称直示については、意味的条件は、日本語、ドイツ語、英語も同じだが、ドイツ語では、*der* 系、遠距離を表す *dieser* 系等、競合する他の表現形が多く、遠距離 *jener* 系は文体的に硬いものとなり、空間直示の *jener* は口語体では回避されていったと推測される(Bühler 1934 (§ 6)参照)。

### 3. 2. 情緒的な直示の比較

*this, that* には情緒的直示と言われる用法がある。遠距離 *that* が心理的に話者から遠い対象に使われることは理解できるが、*affective ‘this’*のように、心理的に共感できる対象を *this* で指すこともできる (Fillmore 1975)。(11)-(13)の例がそれに当たり、*this* は話し手の心理領域・*that* は話し手の心理領域の外にあるものと認識される。これは通常の直示（外界指示）の *this/that* と同じではないかという解釈もある (安藤 1986)。特に *kind, dear, inexperienced* などの快不快・評価を表す形容詞が名詞に付く場合にはそれらの語が称赞・非難のニュアンスの原因となるという解釈も成り立つ (安藤 1986, 230ff.)。ただし、固有名詞は一義的に指示できるので、指示詞 *this/that* は本来的に不要である。Bach や Kissinger のような固有名詞に *this, that* が付加される場合には、やはり話者の心理的な共感（反感、距離感）が加わると考えるべきである。

(11) How's that throat? (あのせきで苦しんでいた (あなたの) 喉はどうなったの?)

(12) That Bach had genius. (あのバッハは天才だった) (Halliday & Hasan 1976)

(13) This Henry Kissinger is really something. (あの/このヘンリーキッシンジャーってのは本当に大したやつだ) (Lakoff 1974)

(14) Dieser Henry Kissinger ist wirklich einer.

(15) Dieser Putin muss wirklich ein Super-Sensibelchen sein! (2014/05/01, ZEIT ONLINE)

### 3. 3. der 系指示詞と直示

前述のようにドイツ語会話では、直示において遠近中立的な *der* 系が多用される (吉田 2013)。ドイツ語の場合には、(14)(15)のように、話し手の領域に属するものが *dieser* (N)として強調され、情緒的ニュアンスも加わるが、近接 *dieser* 以外にも、*der* 系指示詞でも心理的ニュアンスが表される。以下は、ドイツの Google 検索で検索された例である。

(16) "Der hat Talent und ist hilfsbereit" (www.svz.de, 男性を指示)

(17) Denn der hier hat einen Plan: Er zückt sein Handy ...(www.focus.de, 男性を指示)

(18) Der da hat die Party komplett verpennt. (Altes Elliott-Wellen-Forum, 男性を指示)

(19) Der dort hat mir klar gemacht, dass die Flöte ziemlich hinüber ist. ('Flöte reparieren - soo teuer?' 男性を指示 )

(20) Das macht der Sigi, der ist da ein echtes Genie.(Mittelbayerische Zeitung, das は出来事指示、der が男性を指示)

(16)-(20)の *der* は人 (男性) を直示する例だが、*hier*(ここ)、*da*(そこ)、*dort*(向こう)が付くことによって、話者からの距離が拡張できる。*dieser* が話者領域を強調するのに対して、*der* 系は距離にとらわれない中立表現である。標準文法では、人間を代用する要素は、三人称代名詞 (*er/es/sie, sie*) が普通であり、人を指示する *der* 系は「日常会話に限定された、否定的ニュアンスを持つ」という見方が一般的である (Weinrich 1993, Ahrenholz 2007)。確かに、(18)の”Der da hat die Party komplett verpennt” (そいつはパーティーに完全に寝過ぎた) のように、述部に否定的内容が含まれることによって非難のニュアンスが加わる。他方、(20)の”der ist da ein echtes Genie”の場合は、逆に「真の天才だ」という述部によって親近感が加わる。つまり、*der* 系は話者の関心 (共感・反感) を表すが、肯定・否定のどちらの極性も可能である。しかし、直示において話者領域が *der* 系で表せるとすると、*dieser* 系指示詞との相違が何かが問題になる。*der* 系は会話体で強勢を伴う形で現れるが、書き言葉では定冠詞 *der/das/die* とほとんど区別できない。従って、書き言葉での指示詞としての頻度は、(会話引用を別とすれば) *dieser* が多いと予測される (上述の理由で、人称代名詞も多用される)。一方、口語体では、単独指示詞として、*der/das/die* は多用されるが、”*Dieser* ist...”のような *dieser* 系の使用は多くない (Ahrenholz 2007)。*der* 系指示詞については照応でも問題になるので、5節で再び論じる。

### 3. 4. 日本語コソアと直示・照応

本稿では、コソアの議論に深く立ち入る余裕はないが、話者の座標を軸に、コ系とア系の近称・遠称対立と、コ系とソ系の対立（話者・聞き手の領域）が問題となる。直示でない非眼前用法で、指示対象を話し手・聞き手がよく知っている場合には、「ア系」は使えるが、聞き手が知らない（または話し手自身が知らない）場合、非眼前用法で「ソ系」は使えない（久野 1973）。一方、聞き手がない状況、話者が想起する独り言では、ア系しか用いられない（黒田 1979）。

(21a) 話し手：昨日、山田さんに会いました。あの（\*その）人、いつも元気ですね。

聞き手：本当にそうですね。 （久野 1973）

(21b) 話し手：先週神田で火事がありました。その火事で、学生が二人死んだそうです。

聞き手：その火事のことは、新聞で読みました。（久野 1973）

(22) 今日山田さんに会ったけど、あの(\*その)人と会ったのは一体何年ぶりのことだろう。

(23) そうだ、あの(\*その)ことを書いてみよう。 ((22)(23), 黒田 1979)

発話場面に存在する対象なら、その場で話者・聞き手は経験する（「この時計昨日買ったよ」のようなコ系。久野 1973）。発話場面にない非眼前状況で、対象を知っているかどうかは、話者の過去の経験を検索した結果であり、経験済みなら、ア系が使える(22)。しかし、直接経験がない場合、ソ系は使えない ((21a)~(23))。(21b)のように、先行文で「火事」を挙げ、文脈的に照応する場合にソ系は可能である。黒田 (1979)によれば、ア・コ系は直接的経験の対象を表し、一方ソ系は経験とは関係なく概念的対象を表す（黒田 1979）。久野、黒田のソ系の観察は正しいが、すると、ア系（コ系）とソ系の根本的相違は何なのだろうか。

### 4. 指示詞が指示するもの（確定指示と関数的解釈）

前節で見た問題は、直示・照応は何をいかに指示するかについて重要な問題を含んでいる。金水・田窪 (1990)は、代名詞・指示詞は一種の「関数」で、変域は発話状況・文脈情報、値域は指示対象であると主張する。これは I, you のような人称代名詞については正しいが、直示に関わる指示詞に関しては不十分である。そもそも指示詞は2通りの解釈があると思われる。

(24) (眼前の壁の絵を指して) This is a Picasso. [this/that]<sup>w,g</sup> = the unique proximal/distant object the speaker is actually pointing at the time of utterance. (Büring 2011) (g=解釈割当関数)

(cf. 「これは (\*それは, \*あれは)、ピカソの絵です」 Das ist ein Picasso.)

指示詞 **this** が発話場面で指す対象は、話者の指示行為によって一義的に決定される。(24)の **this** の値を指示対象(ein Picasso)とすると、(24)は”ein Picasso is ein Picasso.”という同定文と同義になってしまう。**this** は話者が指差す場所(壁の一点)を指し、値域としてピカソの絵を指示する。Büring(2011)の記述の意味で、**this** は、話者と発話状況に依存する関数であるが、話者と発話状況が固定する限り、値域は一義的で、個体を指す確定指示である(**this** → [Picasso の特定作品])。近接指示である限り、ソ系もア系も不自然であり、「**this/これ/das**」が指差す方向が変われば、(24)の真理値は変動する(ルノアールを指すかもしれない)。**this picture** (この絵)のような限定詞用法の場合は、名詞が表す外延の集合 {a, b, c...} に対する選択(同定)であるが、基本的に確定指示である。**that** (あれ)の直示の場合も同様で、話者から距離的(心理的)に離れた対象であるという条件が加わる(眼前の絵を「あれはピカソだ」とは言えない)。他方、**that** (あれ、jener)の特殊な条件は、眼前の場面にない過去の経験対象であっても、(24)の意味での確定指示が可能だということである(「あの人」は過去の世界 *w* に特定できた個人)。

しかし、ソ系の場合、直示であれ照応であれ、確定指示とは言い切れない、束縛変項に類似した関数依存的解釈(参照する枠組みの要素次第で値域が変動する)が可能である。

- (25) そこは痛くないです。(そこ = 「医者が触った」参照枠に応じて特定される話者の身体)
- (26) a. 運転手さん、そこで止めて。(そこ = 「話者である客が指差した」参照場所である地点)  
 b. ああ、そこですね。(そこ = 「客が指差した」参照枠である場所)
- (27) それは暗い嵐の夜だった。(物語出だし。参照枠としての時点の設定)
- (28) その日の前に (作品タイトル。「死が訪れるいつの日か」という不特定の時を参照)
- (29) 超高齢社会に対応し、誰もが“その人らしく気持ちよく生きる”ことができるまちづくりをすすめます。(議会の政策スローガン。量化表現「誰も」に依存した変項的解釈)

(25)-(27)は、話者が対象を特定できるが、その値は、発話状況(中距離)、相手の動作・発言に依存しつつ変動するので、話者が自ら独立的に制御できない。自他对立としてのコ・ア系による確定指示とは異なり、話者 *Sp*, 世界 *w*, 状況 *s*, 解釈割当 *g* に加え、直示の参照枠(**R**と呼ぼう)が必要であり、**R** が指定されて初めて確定指示になる。一方、(28)(29)のソ系の値域は個体でなく(確定指示ではなく)、不定の変数的解釈であり、(29)は量化表現「誰も」の値に依存した束縛変項を含む  $\exists x[(人(x) \& R(自分らしい, x))...]$ 。コソア系の中で、ソ系を中称あるいは聞き手領域と解釈することは部分的に正しいとしても、完全な一般化とは言えない。変数依存解釈は中称ではないし(確定指示ではない)、ア系と外延的に重なるソ系用法もあるので、物理的距



離だけでは測れない(「あそこで(そこで)止めて」)。また、聞き手領域とすると矛盾が生じる(タクシーで客と運転手が同一場所を指して「そこで」と言う時、聞き手領域Hを指示する訳ではない)。確かに、これらはS・H対立型とS=H融合型の区別として議論されたが、統一的に解釈の方が望ましい。また、ソ系を「話者Sと聞き手Hの間にある共同注意空間」とする解釈(吉本 1992)もあるが、変数依存的解釈はこれから逸脱してしまう。本稿では、黒田(1979)や金水・田窪(1990)が説くように、直示の問題を、(結果として聞き手に配慮する語用論的要素を加味するとしても)話者を中心として聞き手知識に直接依存しない分析方法をとる。ソ系は直示で聞き手領域を指すこともあれば、中称を表す場合もある。他方、先行詞と照応するソ系用法は聞き手と関連しない。ソ系を束縛変項と解釈する分析は、影山(1992)で提案されている。以下は、影山(1992)の例で、個体表現(33)ではソ系の先行詞になれないが、量化表現「誰も」(30,31)、物体(33)では、先行詞の代用表現としてソ系が使えるとする。

- (30) 誰<sub>i</sub>も、\*あの<sub>i</sub>人の/\*この<sub>i</sub>人の/その<sub>i</sub>人の家族を 連れてこなかった  
 (31) 誰<sub>i</sub>も、\*あの<sub>i</sub>/\*この<sub>i</sub>/その<sub>i</sub>家族を 連れてこなかった  
 (32) 山田さん<sub>i</sub>が\*その<sub>i</sub>美しい娘を連れてきた。  
 (33) 鍋<sub>i</sub>はあるけれども、その<sub>i</sub>蓋がない。( (30)-(33)は影山 1992 の例)

影山(1992)は、束縛変項解釈では、(34)のように先行詞となる量化詞「誰も」が抽象的意味(LF)レベルで演算子解釈によって文上位に移動し、痕跡<sub>t<sub>i</sub></sub>がソ系を束縛すると考える。また、関係節演算子OPは再叙代名詞(resumptive pronoun)ソを束縛すると説明する。しかし、影山の説明は短絡的で、これらの例からソ系が束縛変項であることを導くには性急すぎる。まず、(30)-(33)の例は、所有関係を含む名詞句表現(「そのN」)であり、束縛代名詞そのものではない(「誰<sub>i</sub>も、{\*それ<sub>i</sub>が/<sup>OK</sup>自分<sub>i</sub>が}天才とは思わなかった」)。さらに、(36)(37)のような個体表現がなぜソ系による束縛を可能にするのか説明できない。影山は、「スヌーピー」など、一般に知られた有名人は、総称名詞句と似た量化解釈ができると主張する。しかし、筆者は(37)のように、「…という人」のような引用句、「スヌーピー」(というキャラクター)のような、個体表現を導入する名詞修飾節句の関係性(「という者・人」等)によって、変数依存解釈が可能になると考える(堤(2002)も、ソ系は変項を導入するという分析を提案したが、文脈指示に限定している)。

- (34) [誰<sub>i</sub>も、[<sub>t<sub>i</sub></sub> その<sub>i</sub>家族を 連れてこなかった]] (影山 1992)  
 (35) [[その<sub>i</sub>作品が1等賞を受賞した]OP<sub>i</sub>]小学生 (影山 1992)  
 (36) スヌーピー<sub>i</sub>とそ<sub>i</sub>の愉快的仲間たち (影山 1992)

(37) イギリスのスマイルズという人がその『自助論』のなかで...(自助努力の精神: 杉田寛仁)

例(32)でも、「山田さん<sub>i</sub>が、その<sub>i</sub>人の家族を連れてきた」というように、所有関係+修飾句を媒介させると、容認できるようになる。以上から、本稿ではコ・ア系について直示解釈を(38)(39)のように定義し、ソ系について変項依存解釈(40)を提案する。コ系は話者に近い近称、ア系は話者から遠い遠称の確定指示対象を指し、それらは二項的選択を迫る(コレかアレか)。確定指示の意味でコ・ア系は話題(「これは…あれは…だ」)、あるいは焦点を示す(「これが欲しかったのだ」「犯人はあいつだ」)。それに対し、ソ系は話者の座標視点から直接測れない対象である(近接ではない)。また、ソ系を導入するには、指差しによる指示による参照枠(「そこで」)や、先行詞による参照枠 R の導入(所有関係等)が必要である。

(38) コ系：話者領域に近い対象 [+proximal]。択一的。話題か焦点 [+topic/+focus]

(39) ア系：話者領域から遠い対象[+distal]。択一的。話題か焦点 [+topic/+focus]

(コ系、ア系とも直接的な確定指示要素を指示する)

(40) ソ系：話者領域の外 [-proximal]。ある参照枠 R があり、R に依存して指示対象が決まる。

このようにソ系の指示を、話者の直示の原点や照応関係に対する解釈に与える参照枠との関係を必要とするものであると分析すれば、以下のように統一的な解釈が可能になる。

(41) そこで止めて。(-prox)。発話場面にある中距離の参照枠 R 地点 (Sp の指差し)。

(42) そこは痛くない。(-prox)。医者が触った参照枠 R の場所(心理的に話者領域外)。

(43) 誰—その人の N (変項解釈。演算子表現と所有関係)  $\exists x \dots R(x \text{ という人}, x) \dots$

(44) スヌーピーとその愉快的仲間 先行詞 NP— その N (照応) (-prox)。先行詞が R

## 5. 照応形の der 指示詞

ドイツ語 der 系指示詞は、前節のソ系解釈(参照枠 R)と似ているように思われる。der 系指示詞は、定冠詞と形態的に類似しているが、定冠詞 der の指示(定解釈)は特定の、包含的であることが要求される(inclusive, 最大限の対象を指示、唯一性。Lyons 1999)。他方、指示詞 der は特定のであるが、包含性は要求されない(複数の選択肢があっても、指差しによって DER (Mann)と確定できる)。

(45) a. 定冠詞による指示： [ein Mann] → [der Mann] (文脈内で最大限・唯一の対象。他に候

補となるような「男」の対象は、問題にならない)

b. 指示詞による指示: [ein Mann]<sub>1</sub>... [ein Mann]<sub>2</sub> → [der Mann (hier)]<sub>2</sub> (最大限・包括である必要はないが、指差し、距離などの参照枠によって、一義的に特定できるもの)。

指示詞 der には強勢アクセントを置けるが、その場合、唯一的对象の場合には、DER は逆に不適切になる (Gunkel 2006, "\*DER Ministerpräsident ist zurückgetreten!"「あの首相が辞任したんだ」)。典型的な指示代名詞用法としては、(46)(47)のような関係節の先行詞として機能する場合が挙げられる。これらは、関係節が指示代名詞の指示対象を限定する参照枠 R (後方照応) として働くと言える。

(46) Am reichsten ist der, der am wenigsten braucht. (「最も富める者は最も使わない人だ」 Seneca)

(47) Das, was Maria sagt, leuchtet mir ein. (Maria が言っていることは、納得できる)

直示 der 系については、既に 3.3 で見た。der 系の場合、(48)のような、日本語の想起の ア に似た非眼前用法も可能である。しかしそれは、einem Magneten(磁石)を先行詞とする照応的用法であるという解釈も可能である。この場合、先行詞が参照枠 R を形成すると考えれば、直示と同等に扱える。(49)は、Zifonun et al.(1997)からの例で、話題導入[+th=Thema]があり、それを参照して、die 指示詞がまず左方転移(Linksherausstellung: Thema, [der/das/die] +V....)として使用され、二番目は照応形として die が用いられているが、代名詞 sie でも代用できる(sie ging mit)。(49)は口頭による語りであり、der 系が話題を先行詞とする照応表現として多用されることを示す。これは直示の談話場面と同様に、談話で先に現れた表現を参照枠として指示する働きである。

(48)Den Knopf von Aytaschs Gurt kriegt man nur mit einem Magneten auf. Wo ist der? (Felicitas Andresen, "Katzen können sich nicht zudecken")

(49) Sind wir dahingegangen. [Die Schwiegermutter]<sub>+th</sub>, [die]<sub>th</sub> ist mitgegangen, die ging mit, die Alte. (Bottroper Protokolle, Zifonun et al. 1997)

(49)の例は、Zifonun et al. (1997)でも Anadeixis(照応直示)と呼ばれている der 系の機能であるが、照応表現が自らと近い領域にある要素との照応を探る機能である。er/es/sie の人称代名詞との違いについては、Bosch & Umbach (2007) 等が指摘するように、人称代名詞 er/es/sie は主語などが典型だが、先行文の中で導入済みの定要素 (話題) を指す。一方、der 系は先行文で初めて導入された焦点要素 (先行文の後続領域、当該の der 系から見れば近い要素) を指すという役

割分担が見られる(次の(50a,b)は、Bosch & Umbach 2007 の例)。

(50a) Peter<sub>i</sub> wollte mit Paul<sub>k</sub> Tennis spielen. Doch er<sub>{i,k}</sub> war krank. (erはPeterと照応する読みが強い)

(50b) Peter<sub>i</sub> wollte mit Paul<sub>k</sub> Tennis spielen. Doch der<sub>k</sub> war krank. (近接 Paul との照応のみ)

|\_\_\_\_\_||

(50a,b)では先行文で2人の男性という競合する人物表現との照応が問題となり、**der**系は焦点要素の Paul との同一指示解釈のみとされるが、この原理は絶対ではなく、優先原則である。会話体など、**der**系が多用される条件で、かつ、人とモノというように競合しない対象であれば、近い距離から遠い距離への照応指示も可能である(Ahrenholz 2007)。(51a)では、主語である Peter を指す場合、**er/der**も可能だが、近接領域専用の **dieser** 指示詞は非文法的である(右からより近い先行詞 **einen Benz** を飛び越えるため)。他方、焦点である **einen Benz** を指す(51d)の場合、**dieser** は問題なく利用でき、**er/der**系も可能とされる。**dieser, der**は近接原理、**er**は照応関係によって説明できる(書き言葉では指示詞 **der**は回避される傾向にある)。

(51) [Peter]<sub>1</sub> will [einen Benz]<sub>2</sub> kaufen. (Peter=主語(話題)、einen Benz=目的語(焦点))

a) Er<sub>1</sub> hat wohl zuviel Geld. b) Der<sub>1</sub> hat wohl zuviel Geld. c) \*Dieser<sub>1</sub> hat wohl zuviel Geld.

d) Er<sub>2</sub> soll aber nicht zu teuer sein. e) Der<sub>2</sub> soll aber nicht zu teuer sein. f) Dieser<sub>2</sub> soll aber nicht zu teuer sein. (Ahrenholz 2007, 81)

さらに、Ahrenholz 2007 の指摘では、(51)の先行文が "Peter will ihn kaufen." (Peterはそれを買いたいと思っている) というように、人称代名詞 **ihn** で既知の話題要素として導入されている場合には、"**Dieser soll aber nicht zu teuer sein.**" (これは高すぎてはいけない) というように、改めて **dieser** で指すことはできない。これは、**dieser** の選択特性と、人称代名詞の包含性とのギャップがあるからだと説明できる(**ihn**は特定の、かつ、男性を表すモノの最大対象を表し、包含的である。他方、**dieser**は選択的であり、包含・唯一性と矛盾する)。この場合、**der**系も書き言葉では容認しにくい、会話であれば、**er**の代理強調形として解釈される。

一方、Hinterwimmer (2014)によれば、**er**と違って**der**系は、束縛変項の代名詞解釈はできない。しかし、いわゆるロバ文の依存代名詞のような、束縛が関与しない変項的な代用表現(52c,d) (Eタイプ代名詞と呼ばれるもの)では、**der**系は使用可能であると言う。

(52) a. Peter<sub>i</sub> glaubt, dass er/\*der<sub>i</sub> klug ist. (**der**系は Peter に束縛された代名詞として使えない)

- b. [Jeder Mann]<sub>i</sub> glaubt, dass er<sub>i</sub>/\*der<sub>i</sub> klug ist. (演算子—束縛変項の der も使えない)
- c. Wenn [ein Bauer]<sub>i</sub> [einen Esel]<sub>k</sub> besitzt, schlägt der<sub>k</sub> ihn<sub>i</sub>. (ロバ文の E タイプ代名詞、農夫<sub>i</sub>がロバ<sub>k</sub>を所有するなら、(それ<sub>k</sub>を所有した) そいつ<sub>i</sub>は/その<sub>i</sub>男は、それ<sub>k</sub>をたたく)
- d. Hans<sub>i</sub> hat [jedem Studenten]<sub>j</sub> mindestens eine Frage gestellt, die der<sub>j</sub> nicht beantworten konnte.  
(「Hans<sub>i</sub>はどの学生<sub>j</sub>にも、そいつ<sub>j</sub>(\*彼<sub>j</sub>)が答えられないような質問を一つは出した」)

これらが示すのは、der 系は、直示では確定指示の機能をもつが、照応では、完全な束縛変項代名詞ではないが、確定指示とは異なる依存表現であるということである。この一見不整合をどのように解決すれば良いだろうか。筆者の考えでは、der 系指示詞はソ系と類似して、直示の話者原点あるいは照応における話者(語り手)の視点では直接に把握できないもうひとつ別の参照枠(R)を解釈上必要とする。er/es/sie 人称代名詞は、固定した話者視点による確定指示もしくは演算子との束縛関係による依存関係を表す(解釈が同一レベル)。dieser 系指示詞の場合も話者の直示原点(近接性)が明確である。他方、der 系指示詞の場合、直示では近接性ではなく、話者による指差しなどの働きかけ・誘導・共感(反感)の投入が必要である。これを参照枠 R と理解する。また、照応においては、話題の強調化、焦点の話題化、変項との依存解釈など、特殊な選択(参照枠)の戦略を必要とする。書き言葉では、そのような特殊な戦略は利用し難いので、関係節などの明示的な枠組み設定が必要なのである。Hinterwimmer (2014)は、der 系指示詞の指示対象は、談話の視点の中心ではなく、aboutness topic (談話話題)であると呼ぶ。つまり、発話原点(元の文脈)と、それとは別の視点(内側の語りのような新たな文脈)があり、der 系は後者と関連するとしている。(50a,b)のような照応先行詞の解釈の多元性を見れば、一元的に主語(本来の話題)を志向するか(人称代名詞)、焦点要素を新たな話題として別個に設定し直すか(der 系による焦点の参照)、といった参照レベルの問題と考えれば良い。後者の場合には、直線状の談話継続ではないので、新たな話題選択である。また、上記(48)(49)(50)のような der 系の他の使用文脈も同様に解釈できる((48)の前文の話題は"den Knopf..."で、これが談話の中心であるが、そこから転換して、焦点"einem Magneten" (磁石)を参照枠=先行詞として、'der'によって指示を行う照応関係など)。

## 6. まとめ

以上から、英語、日本語、ドイツ語指示詞に関して次のことを確認することができる。

(53)

- ・発話場面に関わる直示と談話文脈に関わる照応は、指示表現の点で統一的に把握できる。
- ・近接(近称) — 遠距離(遠称)の対立は、英語・日本語では有意であるが、ドイツ語では近

接のみが意味をなす (this-that, コ・ア, ドイツ語では **dieser** のみ)。その代わり、ドイツ語では近接と非近接の **dieser – der** 系の対比が存在する。

・話者の近接領域と遠距離領域は照応にも写像される (近接の **this**, コ系, **dieser**。遠距離の **that**, ア系, **jener** (書き言葉の想起))。ただし、照応では近接表現が重要である。

・日本語・ドイツ語では、距離に関わりなく、話者の特定視点や参照枠(R)に応じて指示対象が変動する指示詞 (ソ系, **der** 系) が存在する。それは、直接的に話者が操作できない間接的な参照視点が介在する場合 (日本語、ドイツ語) や、人称代名詞 **er/es/sie** との対比で話題転換を導入する働きをもつ (ドイツ語の **der** 系)。

最後に指示詞を再度図式化する。言語横断的な類型性、普遍性の考察は今後の課題である。

(54)	近接	遠距離	間接参照枠 [一距離]
英	<b>this</b>	<b>that</b>	( <b>that</b> )
日	コ系	ア系	ソ系
ド	<b>dieser</b> 系	—	<b>der</b> 系

### 注

- 1) 本研究は、科学研究費補助金 (基盤C(24520470)「直示と指示・照応の面から見たドイツ語指示表現の研究」吉田光演) による研究助成に基づいている。
- 2) **dieser dort**(あそこのこれ) が可能なのは、先行する **der da** (そこの彼) の **da** から話者が関心を転移したからである。また、Heusinger (2012) によれば、**dieser** 系は非特定の(nonspecific)不定解釈も可能である (日本語の「こんな (ふうな)」に対応)
  - i) **Gestern kam ich in eine Bar und da war dieser Fremde, der mich die ganze Zeit anstarrte.**  
(昨日あるバーに入ると、こんな知らないやつがいて、ずっとこっちを見ていた)
  - 3) **dieser – jener** (後者、前者) には、たとえば次のような例がある。
    - ii) **Er hat zwei Söhne, Tobias<sub>1</sub> und Daniel<sub>2</sub>. Dieser<sub>2</sub> arbeitet als Lehrer, jener<sub>1</sub> studiert Medizin.**

### 参考文献

Ahrenholz, B. (2007): *Verweis mit Demonstrativa im gesprochenen Deutsch*. Berlin: de Gruyter.  
 Blühdorn, H. (2007): Zur Struktur und Interpretation von Relativsätzen, *Deutsche Sprache* 35, 287-314.  
 Bosch, P. & Umbach, C. (2007): Reference Determination for Demonstrative Pronouns. In: B. Dagmar & N. Gargarina (eds.): *Intersentential Pronominal Reference in Child and Adult Language*, ZAS

- Papers in Linguistics, 48. (ZAS), 39-51.
- Bühler, K. (1934, 1982): *Sprachtheorie*, Stuttgart, New York: Gustav Fischer Verlag.
- Büring, D. (2011): "Pronouns". von Heusinger, K., Maienborn, C. and Portner, P. (eds.) *Semantics: An International Handbook of Natural Language Meaning*. 2. Berlin: de Gruyter. 971-996.
- Duden (2006): *Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*. Mannheim: Dudenverlag.
- Fillmore, C.J. (1975): *Santa Cruz Lectures on deixis*. Reproduced by IULC.
- Halliday, M. A. K. & R. Hasan (1976): *Cohesion in English*. London; Longman.
- Heim (1982): *The Semantics of Definites and Indefinite Noun Phrases*. PhD-dissertation, UMass.
- Heim & Kratzer (1997): *Semantics in Generative Grammar*. Blackwell.
- Gunkel, L. (2006): Betontes *der*. In: E. Breindl et al.(eds.): *Grammatische Untersuchungen. Analysen und Reflexionen. Gisela Zifonun zum 60. Geburtstag*. Tübingen: Narr, 79-96.
- Heusinger, K.(2012): Referentialität, Spezifität, und Diskursprominenz im Sprachvergleich. In: L. Gunkel (ed.). *Deutsch im Sprachvergleich - Grammatische Kontraste und Konvergenzen*. Berlin: de Gruyter, 417-455.
- Hinterwimmer, S. (2014): *Demonstrative Pronouns and Perspective, Workshop Demonstration and Demonstratives*, University of Stuttgart. Ms.
- Lakoff, G. (1974): Remarks on This and That. *CLS 10*.
- Lyons, Ch. (1999): *Definiteness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Weinrich, H. (1993): *Textgrammatik der deutschen Sprache*. Mannheim: Dudenverlag.
- Zifonun, G. et al. (1997): *Grammatik der Deutschen Sprache*. Berlin: de Gruyter.
- 安藤貞雄 (1986): 『英語の論理・日本語の論理』, 大修館.
- 影山太郎 (1992): その束縛変項機能、人文論究, 42(3): 49-63
- 神尾昭雄(1990): 『情報のなわばり理論』, 大修館
- 金水敏 田窪行則 (1990): 「談話管理理論から見た日本語の指示詞」. 認知科学の発展 3, 85-115.
- 金水敏 田窪行則(編)(1992): 『指示詞』, ひつじ書房..
- 久野暉 (1973): 「コ・ソ・ア」. 『日本文法研究』, 大修館, 東京.
- 黒田成幸 (1979): 「(コ)・ソ・アについて」. 『英語と日本語と — 林栄一教授還暦記念論文集』, くろしお出版, 東京.
- 堤良一 (2002): 「文脈指示における指示詞の使い分けについて」, 言語研究 122. 45-78.
- 三上 章 (1970): 「コソアド抄」. 『文法小論集』, くろしお出版, 東京.
- 佐久間鼎 (1936, 増補版 1951): 『現代日本語の表現と語法』. 厚生閣, 東京.
- 吉田光演 (2013): 「現代ドイツ語における指示代名詞 *der/das/die* の特徴について」, 『ドイツ文学論集』 46 号, 67-81.
- 吉本啓 (1992): 『日本語の指示詞コソアの体系』, 金水・田窪 (1992) 所収, 105-122.

## Contrastive analysis of deictic and anaphoric demonstratives in Japanese, English, and German

Mitsunobu, YOSHIDA

On the basis of the idea that deictic and anaphoric pronouns are controlled by the same referential mechanism, this paper compares the deictic and anaphoric uses of demonstrative pronouns in Japanese (kore, sore, are), English (this, that), and German (dieser, jener, der), and provides a unified analysis of the deixis and anaphora for direct and indirect reference. Contrary to the traditional view that Japanese has a three-dimensional deictic system (proximal/medial/distal), Japanese deixis is two-dimensional in that proximal 'kore' and distal 'are' refer to the object which is identified from the speaker's point of view just like in English. In Japanese and German, however, there is still a different type of indirect demonstrative. In German the opposition between 'dieser' and 'jener' (this vs. that) tends to disappear while the deictic use of the demonstrative pronouns such as 'der(das/die)' have spread in spoken German to cover deictic reference. More interestingly, Japanese demonstrative 'sore' and German 'der (das/die)' are similar in that they can be used to pick up a variable-like dependent object which requires some indirect and/or anaphoric support by a referential (relational) framework of another referent, because the target object is not directly accessible to the speaker. Thus, the three languages have similar referential uses.

(Japanese) Soko-wa itaku-naidesu! ( (The doctor touched a part of the patient: The body part functions as the indirect referential framework.) That doesn't hurt.)

(German) Peter will einen Benz kaufen. Aber der soll nicht zu teuer sein. (Peter wants to buy a Benz. But it should not be too expensive: Shift of the topic (subject) from the antecedent sentence to another one)